明らかに，中種子の糖業は最も順調なのびを示しているといえるであろう。

以上，中種子糖業の地域経済に与えた影響および，その中に占める地位，また，中種子糖業の性格をもって，このたびの私の論文の中心テーマとした。

南種子町の地誌

菊川淳子

卒業論文を作成するにあたっては，大学に於て学んだ地理学の総復習を通して，できる事ならば〝地理学の本質〟を把握する機会にしたいと考えた。

地理学はしばしば〝垂直に立並ぶ諸科学を水平に切ったその断面〟に例えられる。テーマに〝地誌〟を選んだのは，その諸科学の一部である系統地理学について学ぶ機会の多かった四年間を顧み，その成果を集積し，再構成し，解釈を与えるコログラフィーとしての地理に，より多くの興味を感じたからである。〝地誌〟を書くにあたって，必然的に問題になる地域の設定は，地誌が明らかな方法論を確立した〝科学〟の地位にまで昇華していない地理学の現状では，あえてこれを問題にしない方が賢明だと考えて，離島の種子島をフィールドに選んだ。

しかし，水圏によってある程度まとまった地域を構成している種子島も，均質的にとらえるには，あまりに多様性があり，その約3分の1を占める南種子町が厳密にはこの島を代表するところとはならなかった。

地誌をまとめるにあたって，特に，次の諸点に留意した。

1．地理的環境を構成する諸要因を，人間の経済生活からみた価値判断をもって尺度とする。（即，この地域であれば農業が主要産業であるから，自然環境でいえば，農業を大きく支配する気候，地形，地質がとくに重要となる。）

2．地域の性格を，その属するカテゴリーの中で普遍化して考察する。（即，この地域では，島として他の日本の離島の中に占める位置を明らかにする。）

3．地域のもつ問題点を明らかにする。（現実をありのまゝ研究対象とする地理の場合，地域の問題点にぶつかるのは必然的な結果であるが，人類福祉に貢献するという科学本来の使命に還元して考えても，これが意識的になされなければならないと考える。）

以上，当初の考えをなるべく具体的に網羅すべく，全体の構成を大きく三つにわけて次の様にした。

Ⅰ．種子島概況

Ⅱ．南種子町の地誌

Ⅲ．種子島を通してみる日本離島のもつ問題点

第Ⅰ章では，Ⅱ章の詳細は記載に対する予備知識と，島全体の性格にふれた。

第Ⅱ章では，主な地理的環境要素を，農業を営む上からの適否に観点をおいて考察した。したがって，§の立て方が系統的になっていないが，特に関係深い要因を組み合せて記載した。

第Ⅲ章では，具体的な種子島の例から表れた，離島ゆえの悩み，問題点を指摘し，それを改善にむかわせる指標を，振興会等の資料をもとに考察した。

でき上った論文をみると，当初の意図を反映したものとしては，実に不本意なできばえである。

歴史の扱いが，ほとんど地理の要素として消化されていないこと。地誌としての重要な集落の記載が手薄であること等々，不備がいたるところ目につく。

しかし，歴史書に決定版というものがないのと同様，地誌にも，最終的なものはないという。その地域のインフォメーションが増すにつれ，また地域が変貌していくにつれてそれは書き改められるべきものであろう。

この調査中，既存の研究資料が少く，統計資料が充分でなく，現地調査が満足に行われなかったことによるこの地誌の不完全さも，この意味では，弁解の余地も感じ，書いた意義をも感じる者である。

屋久島の地誌

深　津　紀　代　美

1　調査地域と研究の目的

調査地域として選んだ屋久島は，九州の南端佐多岬の南方75km，種子島の西側にある，ほゞ円形の島で，東西28km，南北約24km，面積540km²，人口約22000人である。行政的には島の北半と口永良部島を合わせて上屋久島，南半は屋久町となっているが，口永楽部島は調査の対象としなかった。（屋久島のみでも日本で第5位の面積をもち，広範囲になりすぎるので）屋久島を調査地域とした理由は①離島問題に興味を持っていた事②島は地理の目的であるところの地域性をつかむのに割合容易ではないかと考えた事③屋久島には，自然人文共に興味深い現象が見られ，資料も比較的豊富である事④種子島をやる人がいるので比較研究が可能ではないかと考えた事などである。しかしこのような遠隔地をフィールドとして選択した事は，現地へ行く日時も限られ，教官の指導もいきわたらず，私のように調査経験